新聞を読んで

致命的な「1日遅れ」

奥村　信幸

松本龍復興相の「放言」辞任報道から、現在の新聞、テレビなどの「伝統的メディア」の問題がよく見えてきた。7月3日から4日にかけて、新聞やテレビは何をしていたのだろう？

彼が岩手・宮城県庁を訪れたのは3日午後のことだ。しかし、発言について翌朝の各紙は朝日新聞が少々詳しく伝えてはいるものの、あきれるような「上から目線」のニュアンスはどの記事からも伝わってこない。

私はこの出来事をツイッター経由で知り、東北放送のローカルニュースがユーチューブにアップされたものを見た。すでに3日夜から翌朝方にかけて、この動画を何万人もが閲覧し、ツイッターやフェイスブックなどで議論を繰り広げていた。

その夜ネット上では、「被災地の人たちの気持ちをどう考えているのか」という素直な怒りからゲストを迎えるマナーなど、実に多様な議論が繰り広げられた。さらに松本氏の政治的な背景や村井宮城県知事との会談で「何もしないぞ」と発言して問題とされた水産特区構想に、あるシンクタンクの関与が突出しているという問題までもが指摘されていたのだ。

そして、何より大問題とされたのは、「これはオフレコ、書いた社は終わり」という部分が、テレビでも新聞のウェブ記事でも、ほとんど触れられていない点だった。

「素人」たちが当日夜にこれだけの議論を展開できたのに、新聞やテレビが翌4日午後になって、騒ぎ出した野党や地元の住民の反発の声を借りて、ようやく本格的な批判を始めたのはなぜなのか。「横並び」「総すくみ」の体質が見え隠れしていないか。

だから5日の東京新聞が社説で「書くなと威嚇すれば素直に従うと思っているのか」と怒って見せても、安全地帯からものを言っているようで鼻白む。せっかく同日の「こちら特報部」に松本氏の言動についての詳しい分析を載せるだけの情報を持っているのなら、1日早く冷静な「怒り方」を示してほしかった。

これからの新聞は、ウェブサイトの活用も視野に入れてもらいたい。現地に記者が行っていたのなら、村井知事との会見の一部始終の記録だけでも、せめて3日のうちに、サイトに載せてほしかった。

あるベテラン記者（東京新聞ではない）が「新聞は大事なものを選んで読者に示すのが仕事。会見の全文を公開することはあり得ない」と私に力説したことがある。しかし、その考え方は過去のものだ。インターネット時代のジャーナリズムは、検証を読者とともに行うための材料を提供し、議論の場も提供することが求められている。ネット上の「ニュースの消費者」は新聞のサイクルより先に動いている。

（立命館大学准教授）

※この批評は最終版を基にしています。